

ロシア科学アカデミー東洋学研究所サンクト・ペテルブルク支部 (SPbF IVRAN⁽¹⁾) の東洋写本コレクション

I. F. ポポワ

ペテルブルク東洋学研究所 (かつてのアジア博物館) の写本コレクションは、ロシアで最大のものであり、世界中でも最大かつ貴重なコレクションを持つ2、3箇所の1つに数えられる。この中には、65の現代語もしくは滅びた言語によって記されたおよそ10万点の写本または古い印刷技術による図書が収められている。このコレクションの形成史は、1818年のアジア博物館の設立および1724年のロシア科学アカデミーそのものの設立まで遡る。東洋言語による最初期の写本と図書は、18世紀初頭からロシアのコレクションに将来され始めた。最初に刊行されたロシア科学アカデミー図書館手引きの編者 I. G. バクメイステル *Bakmeister* は、ゲラルド・フリードリヒ・ミッレル *Gerard Fridrikh Miller* (1705-1783年) とピョートル・シモン・パラス *Petr Simon Pallas*⁽²⁾ (1741-1811年) がイルティシュ河沿いのアブライ・キトにある僧院から収集したチベット語——すなわち当時の名称では「タンゲート語」——やモンゴル語の書籍について言及している⁽ⁱ⁾。ロシアの個人的コレクションの中には、アラビア語、トルコ語、ベルシャ語による文献が様々なかたちで入った。中国語 [漢文の] 図書はロシア帝国副宰相 A. I. オステルマン *Osterman*⁽³⁾ (1686-1747年) やその他の面々の個人文庫に入っているが⁽ⁱⁱ⁾、おそらくこれらは、ヨーロッパから彼らが入手したものであろう。

積極的に蒐集活動を行ったのは皇帝ピョートル1世であった。「彼の治世において、中国語、満洲語、日本語、モンゴル語、チベット語の著作の収集が始められ、その他のイスラームの稀覯書、またおそらくはイスラーム貨幣の収集についても同様であった」⁽ⁱⁱⁱ⁾ と考えられている。ピョートルの膨大なコレクションの保管のために、「図書館」とクンストカメラ⁽⁴⁾が1714年に設立された。1720年には帝室図書館は1万5千冊の蔵書を数えていた^(iv)。1724年に科学アカデミーが創設されて以来、図書館とクンストカメラはアカデミーの管轄となった。

1730年になると、科学アカデミーの図書館には中国からの書物 (8帙82冊) が入った。これらは、ロシアの外交官であるローレンツ・ランゲ *Lorents Lang*⁽⁵⁾ がもたらしたものであった^(v)。その後、アカデミーの中国語および満洲語本コレクションは不断に拡充されていったが、それは、まず第一に、辞典、儒教古典、歴史・地理・自然科学の内容を持つ作品と、イエズス会宣教師の業績によるものだった。科学アカデミーのコレクションには、イスラームの作品も入った。たとえば、コーランや『祈祷書』であり、それらの多くは高い水準の芸術的な装丁が特徴的であった^(vi)。

1791年と1795年にエカテリーナ二世は、日本の産品のコレクションを科学アカデミーに対して寄贈したが、その中には「幾つかの」手稿本も含まれていた^(vii)。コレクションの中には、オランダ東インド会社医師のシュトゥツェル *Schützer* がエカテリーナに贈った日本の諸都市の地図や見取り図、オランダ語図書の日本語訳^(viii)、さらに大黒屋光太夫（船乗り、太平洋上の難破に遭い、アリューシャン列島の一つ [=アムチトカ島] に漂着した^(ix)）から得た手稿本や木版印刷物がある。

1818年にアジア博物館が組織された時、科学アカデミーのコレクションにおいては、中国語図書は235点を数え^(x)、105点のアラビア文字による写本^(xi)、29点の日本語写本と木版印刷物があった^(xii)。残念なことに、「図書館」およびクンストカメラからアジア博物館に移された東洋言語による文献の全体数についての正確な情報は残っていない。18世紀においては、東洋言語を習得していた人間は極めて限られており、そのため、アジアから将来された資料についての最初期の記録は、形式に特化していた。たとえば、「中国摂政の妻の未完肖像画」^(xiii)、「錦で表を飾った15葉の折りたたみ本 [屏風?]」で、…平織りの上に古い技法で塗りたくった風景^(xiv)等々である。それゆえに、博物館および科学アカデミー書籍コレクションの最初期に公刊されたカタログは、東洋言語による図書を含んでいないのである^(xv)。

1818年にアジア博物館が組織されたあと、科学アカデミーは、東洋言語による図書をクンストカメラからこの博物館へと移し、のちには、アジアから図書を当館へ送るようになった。残念ながらアジア博物館に入る時に必ずしも詳細な目録があった訳ではないため、それぞれの作品が辿ってきた運命を追跡することが可能であるとは言えない。保存されている個々の書き付けや情報から判断すると、18世紀～19世紀初において、最重要の関心は、辞典あるいは文法、歴史、地理、思想その他の東洋諸国の全体的な理解を助けるような文献の収集に向けられていたと結論付けることができる。アジア博物館は、目的を持って収集活動に従事した研究者のコレクションを集めながら、研究の対象としての文献を選抜し始めたのであった。

アジア博物館にとって最初の大きな入手 [の機会] となったのは、ジャン・バティスト・[ルイ・ジャック] ルソー *Jean-Baptiste Rousseau* (1780-1831年) のアラビア語、ペルシャ語、トルコ語写本の著名なコレクションを購入したことであった。彼は、フランスの宝石商、外交官⁽⁶⁾にしてコレクターであり、啓蒙思想家ジャン・ジャック・ルソー (1712-1778年) の親族でもあった。およそ500点の写本からなるコレクションを、ロシア政府は二度にわたり受け入れた。つまり、1819年と1825年に、アカデミーのコレクションはすばらしい手稿本によって補われたのである。ジャン・バティスト・ルソーは、彼が人生の大半を過ごした東洋にかんする通人であっただけでなく、繊細な感性の持ち主であり、新しい世代の宝石商でもあった。彼は、目的意識を持って、芸術的に価値の高い写本、また著名人の自筆本を収集した。ルソーのコレクションからアジア博物館に将来されたものとして、良く知られた文献学者アル・ハリリー⁽⁷⁾ (1054-1122年) による『マカーマ *maqāma*』(マカーマート *maqāmāt*、いかさま話の集成)、十字軍遠征時代のアラブ騎士伝のウサマ・イブン・ムンキズ *Usāma ibn-Munqidh*⁽⁸⁾ (1095-1188年) 自筆本、さらにアブドゥッラー・イブン・アル・ファズル *Abdallāh ibn al-Faḍl*⁽⁹⁾ (1052年以降死去) が翻訳したアラビア語によるすぐれた挿絵付きの「聖詠経」——これは1649年にアラブの正教徒でイコン画家のユースフ・アル・ムサッヴィル *Yūsuf al-Muṣavvir* が書き写し⁽¹⁰⁾、挿絵をつけたものであ

る——がある^(xvi)。

サンスクリット語、中国語、モンゴル語、チベット語による書籍および写本は、1836年、1838年にアジア博物館に将来され、パヴェル・リヴォヴィチ・シリグ・フォン＝カンシュタット *Pavel L'vovich Shilling fon Kanshtadt* (1786-1837年) の2つの広範なコレクションから成っている。コレクションの中には、辞典、百科事典、儒教の古典作品、歴史・地理・哲学・数学・天文学・自然科学・医学にかかわる書、地図、カトリック宣教師の神学的作品がある。コレクションから将来されたチベット語、モンゴル語の書籍の大部分は、仏教にかかわる内容を持っている。

P. L. シリグやその他の人物の幾つかの記述は、彼のコレクションが、それ自体よく体系化された一つの文庫となっていたことを証明している。P. L. シリグの第一コレクションは、全体として、2000点以上の東洋語文献を数え (286タイトル^(xvii))、その中には、他のどのヨーロッパのコレクションも有していない作品が孤本としてある^(xviii)。P. L. シリグの第一コレクションについての細かな記述は、ペテルブルク東洋学研究所の東洋学者アーカイヴスの彼自身のフォンド [所蔵分類の単位] に残されている。これらは、基本的に、彼のために中国で図書を買って求めた通信員や、ロシア正教宣教師らによるものであった^(xix)。P. L. シリグの第二コレクションは、その総量から言って、第一のものはるかに凌駕し、4800冊を超えるとみなされている。コレクションの解説は、Ia. I. シュミット *Shmidt*⁽¹⁾ および N. Ia. ビチューリン *Bichurin*⁽¹²⁾ が行っている。前者はチベット・モンゴル語の部分で、後者は中国語、満洲語、日本語、朝鮮語による作品を担当したのであった^(xx)。

アジア博物館初代館長フリスティアン・ダニロヴィチ・フレン *Khristian Danilovich Fren* (1782-1851年) は、直接の研究だけでなく、図書・写本コレクションの充実にも多くの力を注いだ人物であった。1833年、彼は当時のロシア帝国大蔵大臣イゴール・フランツェヴィチ・カンクリン *Egor Frantsevich Kankrin* (1774-1845年) に次のような提議を行った。それは、[大蔵]省が資金を提供し、東洋諸国に赴任しているすべての領事に対し、アジア博物館のために手稿本を購入することを義務付けるというものであった。対応する通達は、1844年に E. F. カンクリンの後任者であるフョードル・パヴロヴィチ・ヴロンチェンコ *Fedor Pavlovich Vronchenko* (1780-1852年) により発せられ、1914年まで、すなわち第一次世界大戦の開戦に至るまで効力を持っていた。ロシア外交官らの努力の結果として、一連の貴重な手稿本により、アジア博物館のコレクションは充実したものとなったのである。

1836年には、サンクト・ペテルブルク科学アカデミーの新規約が裁可されたが、それは、アカデミーの諸博物館の学芸員および作業人員の定員維持費について丁度4倍増とすることを定めていた。これに加え、「必要に応じ、資金次第で」定員以上の職員を招集することが許されていた。この規約に呼応して、アカデミー総裁は、1週間の内2日を、「参観することを望む全ての人に対し」^(xxi)、図書館およびアカデミーの博物館への入館日として割り当てたのである。このような変化によって、アジア博物館は、旅行者や収集家に俸給を支払えるようになり、またコレクションの記録のための臨時職員を雇用することができるようになった。

言及しておかねばならないのは、アジア博物館の書庫の写本の他に、東洋貨幣が存在し、コレクションの当該部門の拡充について、おもな学術的関心を貨幣学に向けていた Kh. D. フレンが、やはり非常に積極的に従事したことである。この目的のために、1831年、『サンクト・ペテルブ

ルク通報』紙を通じて、彼は東洋貨幣の持ち主に呼びかけを行った^(xxii)。そのほかに、アジア博物館はかなりの量の「骨董品」と工芸品を有していた。1840年代初めに、アジア博物館は（自らのコレクションの構成にかんして）次のような機構になっていた：第Ⅰ部門＝書籍と個人の蔵書。第Ⅱ部門＝東洋写本、中国や日本その他の木版印刷物。第Ⅲ部門＝西洋諸語による写本作品や論文、銘文、見取り図など。第Ⅳ部門＝貨幣陳列室 *Mintskabinet*⁽¹³⁾（貨幣コレクション）。第Ⅴ部門＝骨董品、護符、印璽、その他の注目に値するものや稀少なもの^(xxiii)。

1835年に、アジア博物館のコレクションには、ロンドンで購入した D. スチュアート *Stiuart* のインド写本95点が補充された。このコレクションは、18世紀後半の北インドにおけるさまざまな地域で、丁寧かつ正確に写されたサンスクリット語文献の多様なジャンルを含んでいる^(xxiv)。

1837年には、アジア博物館の業務に、科学アカデミーの助手としてフランスから招かれたコーカサス学者マリ・イヴァノヴィチ・ブロッセ *Marii Ivanovich Brosse*（1802-1880年）が加わり、アカデミーの写本コレクションの拡充と記録に並外れて大きな役割を果たしたのである。M. I. ブロッセが来る前は、アジア博物館のコレクションには3点のグルジア語写本、11点のアルメニア語写本があった^(xxv)。最初期のグルジア語写本は、1818年に科学アカデミー図書館からアジア博物館に移管されたものである。これは18世紀の S. チヘイゼ *Chkheidze* と I. [ママ] オルベリアニ *Orbeliani*⁽¹⁴⁾の歴史年代記の唯一伝わったもので、1773年の日付がある。

Kh. D. フレンとその後の第2代アジア博物館館長ボリス・アンドレーヴィチ・ドルン *Boris Andreevich Dorn*（1805-1881年）に支持された M. I. ブロッセの努力のおかげで、博物館のコレクションには、書籍蒐集家ペトレ・ケバゼ *Petre Kebabze* とゲオルギ・アヴァリシヴィリ *Georgii Avalishvili* のコレクションや、ティムラズ・バグラティオニ⁽¹⁵⁾ *Teimuraz Bagrationi* の写本および書籍（この中には、ダヴィド *David*・バグラティオニの若干の写本もある）、M. I. ブロッセの注文により複製された個々の写しが将来された。結果として、優良かつ独特のコレクションが形成された^(xxvi)。現在、これは425点を数え、筆写年代は1088年から1870年代にわたっている。やはり M. I. ブロッセの活躍した時期にすぐれて大きくなったアルメニア語写本のコレクションには、現在410点の写本がある。筆写年代は1186-1880年におよぶ。アルメニア語の礼拝用手稿本の中で際立っているのは、細密画と豊かな装飾を伴って芸術的に高度に装丁された2点の福音書である。すなわち、キリキア⁽¹⁶⁾で1292年に筆写されたもの（v57）とイスファハーンで1423年に写されたもの（V45）である。

19-20世紀初頭の間において、写本コレクションは、アジア博物館自身が行った買い付けによって、また個人からの寄贈によって、さらに故人となった東洋学者からの相続によって補われ続けていた。副本の交換も行われた。フランスの中国学者スタニスラフ・ジュリアン *Stanislav Julien*（1845年以降ロシア科学アカデミー準会員）は、何度かアジア博物館の図書館を利用し、副本交換という方法によってこの図書館に中国語資料を補充した^(xxvii)。のちに、20世紀になっても、この伝統は別の優れたフランスの学者ポール・ペリオ *Paul Pelliot*（1878-1945年）によって維持されたのである。

1855-1857年にはアジア博物館にカザン宣教団のコレクションが移管された^(xxviii)。1864年に外務省アジア局から大量のコレクションが移っている。

19世紀80年代末以降、アジア博物館には現在の中華人民共和国新疆からの資料が将来された。

これは、サンスクリット語、ウイグル語、サカ語、トハラ語、チベット語による紀元後1千年紀の写本のコレクションである。これらはロシアの学者または外交官、すなわち N. F. ペトロフスキー *Petrovskii*、N. N. クロトコフ *Krotkov*、A. A. デイヤコフ *D'iakov*、V. I. ロボロフスキー *Roborovskii*、I. P. ラヴロフ *Lavrov* らによって収集されたものである^(xxx)。写本は古文書や仏典の断片であった。これらはアジア博物館の中央アジアファンド、[すなわち現在の] ペテルブルク東洋学研究所の西域学部門 *Serindica* に入り、4652という総点数になっている。

1902年にはアジア博物館のファンドに G. Ts. ツィビコフ *Tsybikov*⁽¹⁷⁾ のチベット語書籍 (333冊) という貴重なコレクションが加わった。これらは、彼がアムボ *Ambo* や中央チベット——クブムン *Kumbum*⁽¹⁸⁾、クンデリン⁽¹⁹⁾ *Kundeling*、ガンデン⁽²⁰⁾ *Ganden* やその他——の僧院に滞在していた時に収集したものである。直後に、同じように貴重な B.バラディン *Baradiin*⁽²¹⁾ のクブムンとラブラン *Labrang*⁽²²⁾ からのコレクションも取められた^(xxx)。のちに、チベット語ファンドはソ連時代になってからブリヤーチャとカルムイキヤの礼拝堂から持ち込まれた木版印刷物によって補われ、現在では、ここには21789点の木版印刷物が入っている。このファンドには多くの副本があるが、たとえば、デルゲ *Dergez* 版のカングュル *Gandzhur* 仏典 [大蔵経] やテンギュル *Dandzhur* の経典解説 [論疏部] 全集 (約500巻) のような極めて稀な出版物も存在している。

1907年にはアジア博物館に、外交官にして中国学者のピョートル・アンドレーヴィチ・ドミトリエフスキー *Petr Andreevich Dmitrievskii* (1852-1899年) のコレクションが取められた。彼は1891-99年にソウル領事として勤務していた。コレクションの中にあるのは、基本的に朝鮮の歴史、地理、思想について漢文でものされた木版印刷物である。のちに (1917年以降) アジア博物館の朝鮮語ファンドにはイギリスの外交官 U. Dzh. アストン *Aston* (1841-1911年) のコレクションが加えられ、さらに、第二次大戦後には P. G. フォン・メルレンドルフ *fon Mellendorf* (1847-1901年) のコレクションからの図書が加えられた。現在では、ペテルブルク東洋学研究所の朝鮮語ファンドにおいて、206点の文献を挙げることができる。

P. A. ドミトリエフスキーの蔵書の内、いくつかの図書は日本語ファンドに加えられ、とくに、仏教にかかわる作品『南海行と【祖国への】帰還についての物語』(南海寄歸傳) があげられる。1910年には、ヨシフ・アントノヴィチ・ゴシュケウヴィチ *Iosif Antonovich Goshkevich* (1852-1899年)⁽²³⁾ の蔵書から『全宗派のブツダ像集増補』(増補諸宗佛像圖彙) と『日本語読み付き浄土宗図解殉教録』(浄土宗回向文和訓圖會) が加わった。N. P. ザブーギン *Zabugin* のコレクションから、アジア博物館のコレクションの中に、『正法山の六人の長の伝記』(正法山六祖傳) の写本が1911年に将来されている。

科学アカデミーの収集活動における新しい段階は、19世紀末から20世紀初頭にかけてのロシアの学者たちによる活発な調査活動と結びついている。1893-95年の V. I. ロボロフスキーとピョートル・クジミチ・コズロフ *Petr Kuz'mich Kozlov*⁽²⁴⁾ (1863-1935年) によるトゥルファンへの調査団は、骨董品と、東洋のウイグル語やシリア語による写本の断簡とをもたらし、A. O. イヴァノフスキー *Ivanovskii* とセルゲイ・フョードロヴィチ・オルデンブルク *Sergei Fedorovich Ol'denburg* (1863-1934年)⁽²⁵⁾ が研究に当たった^(xxxi)。その後発掘物はアジア博物館の所蔵庫に移されたのである。

1900年になると、ロシア皇帝の監督の下に、中央アジア・東アジア研究のためのロシア委員
<52> ロシア科学アカデミー東洋学研究所サンクト・ペテルブルク支部 (SPbF IVRAN) の東洋写本コレクション (ポボウ)

会⁽²⁶⁾が設けられた。委員会の使命は、ロシアおよび外国の調査隊の組織と協力にあった。この委員会の議長となったのは V. V. ラドロフ⁽²⁷⁾であり、副議長は S. F. オルデンブルクであった。

ロシア第1次トルキスタン調査団の支度にかかわる決定は、委員会によって採択されたが、この時は、それまでに現在の新疆に相当する地域を訪れた調査団の資料は何一つ公けにされていないのであった。従って、ペテルブルクでは、どこで実際に体系的な作業をすればよいかという問題を解決することは困難であった。1910年8月22日、調査団は、カラシャル⁽²⁸⁾そばのシクシン *Shikshin* 地区で仕事に取り掛かり、さらにトゥルファンとクチャで発掘を行った。その結果、およそ10堂の地上あるいは洞中の仏教寺院が研究されたのである⁽²⁹⁾。調査団の資料は、当初、ロシア科学アカデミー人類・民族学博物館（クンストカメラ）に移され、そこで最初の整理が行われた。1931-1932年にはエルミタージュに移され、その一部は1935年時の展示に供された。資料の中には、アジア博物館に移管されたおよそ100点の写本があったのである。

1910年、セルゲイ・エフィモヴィチ・マローフ *Sergei Efimovich Malov* (1880-1957年) により発見され、アジア博物館にひきわたされたのは、『黄金の光のストラ⁽³⁰⁾』（[ウイグル語で] *Altun jaraq*, [サンスクリット語で] *Survarṇaprabhāsa* 経典の一ヴァリエーション）の独自のウイグル語写本であり、これはのちに公刊され、一部はヴァシーリー・ヴァシーリエヴィチ・ラドロフ *Vasilii Vasil'evich Radlov* (1837-1918年) によって、ドイツ語に翻訳された⁽³¹⁾。この写本は347葉から成り、保存状態が良く、世界中のコレクションの中にあって、もっとも完全な版となっている。

1911年に、アジア博物館に将来されたのは、P. K. コズロフのモンゴル・四川調査団のコレクションである。彼は、1907-1909年にゴビ砂漠で、タングートの廃城カラ=ホトを発見した。このコレクションは、おもに、タングート族の滅びた言語 [西夏語] による資料から成り、また中国語の著作もかなりの量を含んでいる。ペテルブルク東洋学研究所のタングート語コレクションにおいては、現在6000点の写本や木版印刷物を数え、その中には、経典 *sutra*、経典の注釈 *shastra*、戒律 *vinaya* のような仏教的内容を持つものが多くある。そのほとんどは、中国語あるいはチベット語からの翻訳となっている。タングート語のオリジナルな仏教作品はチベット様式の模倣であり、中国の史実を利用した道德の説教となっている^(xxxii)。カラ=ホトの中国語作品の中に283点の仏教著作があり、分量は多くないが、簡潔に分かりやすく教えの根本的主張を述べる経典が優位を占めている^(xxxiii)。その他の少数の経典は、31点を数えるが、その中には15点の『蓮の経典 [=法華経]』がある。これらの内、9点は1146年の版本であり、6点は様々な時代の写本の断簡であり、もっとも古いものは7世紀後半と年代が定められ、9世紀末のものが1点、16世紀半ばのものが2点ある^(xxxiv)。

1910年に、在テヘランおよび北京のロシア大使館付き医師、エミーリー・ヴァシーリエヴィチ・ブレットシュネイデル *Emilii Vasil'evich Bretshneider*⁽³²⁾ (1833-1901年) の遺言により、その所蔵品の中から図書 (23タイトル) がアジア博物館のコレクションに加わった。おもにこれは収集者の学術的関心に沿うような地理学・植物学・医学にかかわる著作であったが、そのほかに「北京の風俗と習慣」という主題による17点の興味深い画集があった。画集の図画は、水彩絵の具で白い厚紙の上に描かれている。一つ一つの挿絵には説明書きが付され、その幾つかにはロシア語訳が書いてある。それぞれの画集の図画の量は約100葉である。

1914-1915年のS. F. オルデンブルクのロシア第2次トルキスタン調査団の成果となったのは、よく知られた4-11世紀の敦煌文書コレクションであり、これらは千仏洞からもたらされた。細かな断簡を含めて約1万9千点を数えている。約400点の完全な巻物はS. F. オルデンブルクが現地の住人から入手したもので、断簡は考古学的発掘によって洞内において発見されたものであった。その他に、ペテルブルク東洋学研究所の敦煌フォンドには、1909-1910年のS. E. マローフのホータン調査団による幾つかの写本、N. N. クロトコフ *Krotkov* が収集した一連の文書群が入っている。

仏教僧院の蔵書の一部であったペテルブルク東洋学研究所の敦煌コレクションの写本は、その大半を仏典が占めている。80点以上のタイトルがあり、さらにその多くは、大部の目録がある。コレクションには、仏典への註釈、偽経、仏説、さらに祈祷文、儀礼次第書や仏教典礼にかかわるその他の作品の文言がある。多くの文献は古代建造物の廃墟の瓦礫の中から掘り出され、そのために、細かな断簡の形で伝わっている。当初、アジア博物館の敦煌コレクションには、造形芸術作品が入っていた。しかし、1970年代初めに、絹や紙に描かれた71点の絵画作品 (No. Dkh zhiv.) が、修復と展示のために、エルミタージュ美術館に移された。ここは、1931-1932年以来、S. F. オルデンブルクのロシア第1次トルキスタン調査団がもたらした美術作品を所蔵していたのである。1970-1980年代に、M. L. ルドヴァ＝プチェーリナ *Rudova-Pchelina* は、図像学的になかなか解説できかった断簡の復元を遂行した。なおこの断簡は、現在ではエルミタージュ美術館に陳列されている。1994-2002年にほとんど全てのペテルブルク東洋学研究所敦煌フォンドの写本が上海の「古籍出版社」により刊行された。計17巻の『ロシア所蔵の敦煌写本』^(xxxv)である。

アジア博物館の保存活動の重要な契機は、ヴァシーリー・ミハイロヴィチ・アレクセーエフ *Vasilii Mikhailovich Alekseev* (1881-1951年) の名と結びついている。彼は1910年に中国語のコレクションと蔵書の体系的な整理および補充を開始した。S. F. オルデンブルクは、V. M. アレクセーエフの仕事の意義を評価して次のように記している。アジア博物館における彼の活動は「おもに、博物館の印刷物および写本の中国語部門の体系化にある。この部門は、1913年までに様々な形で博物館に将来された、あるいは博物館が、おもに受動的に、博物館のイニシアティブなく、また建物の壁の外に出て探索することなく手に入れた中途半端なコレクションから成り立っていたのである」^(xxxvi)。V. M. アレクセーエフの尽力のおかげで、中国・日本からアジア博物館へと、大量、かつ内容面できわめて多様な叢書と参考図書が取り寄せられたのであった。

1913年10月14日に、V. M. アレクセーエフは、アジア博物館に、中国の古代の都長安（現在の西安）において836年に石碑に穿たれた儒教古典の文面の395本のエスタムパージュ（石刻文から写した拓本）を引きわたした。この将来は、ペテルブルク東洋学研究所の拓本コレクションの核となり、今では約1000枚を数えるにいたっている。まさにこのV. M. アレクセーエフが、それまで一緒に保管されていた中国語の木版印刷物と写本とを区分したのであった。彼の体系的な仕事のおかげで、アジア博物館のコレクションにおいては、中国語木版印刷物フォンド（現在、約4000タイトル）と中国語写本新フォンド（フォンドNOVA、約400タイトル）に分けられている。後者には、比較的後期、17-20世紀初頭の様々な内容を持つ写本（聖書や福音書の文言の中国語訳、中国におけるキリスト教宣教師たちの活動にかんする資料、芸術の古典や大衆作品、戯曲の歌詞、秘密教派の祈祷書や儀礼次第書など）が含まれ、また中国語による古文書資料もある。

1917年の10月革命以後、一連の研究・教育機関の再組織の過程において、アジア博物館には東洋諸言語による写本が移管された。一方では、アジア博物館の所蔵品の中から、その他の学術機関や博物館へ、東洋貨幣コレクションが移された。

1919年に、外務省東洋局からアジア博物館に将来されたのは、「ムラッカ *muraqqa*」という16-18世紀のペルシャおよびインドの細密画の画集で、これは A. Ia. イタリンスキー *Italinski*⁽³³⁾ のコレクション (D181) であった^(xxxvii)。また1921年には、アレクサンドル三世博物館の民族学部門(現在のロシア民族学博物館)から、17世紀イスファハーン派の「ムラッカ」画の非常に独特な一枚が将来された (E14)。このときに、アジア博物館の日本フォンドが、大槻茂質 [= 玄沢] の興味深い写本『四海についての驚くべき情報』(環海異聞⁽³⁴⁾) ——大日本帝国駐ロシア大使館文庫印影が見られる——によって、充実したものとなったことは明らかである。写本には、1793年に海難の結果ロシアに滞在し、12年を彼の地で過ごし、その後世界一周を行った「ナデーダ」号により1805年4月に長崎に到着した四人の日本人船員の個人的な見聞の記録がある。

1930年にアジア博物館は全館員と全コレクションとともに、新たに創設されたソ連科学アカデミー東洋学研究所の管轄下に入り、この時、写本コレクションの遺物の記録と出版は、以前と同様に新しい体制の最重要課題の一つであり続けていた。

1933年に、東洋学研究所の書庫に、非常に興味深いコレクション「ムグ山からの文書⁽³⁵⁾」がタジキスタンより将来された。1932年春、ザフマトアーバード *Zakhmatabad* 地区ハイラバード *Khairabad* 村の住人が、たまたまムグ城 *Kal'i Mug* 廃墟(ペンジケント)から、皮張りの籠および灰色がかかった絹紙の上に読めない文字により記された文書を発見した。彼らは、発見したものを党地区委員会書記のアブドゥルハミド・プラーティーにわたし、彼はタジキスタン科学アカデミーに照会した。科学アカデミーの研究者がソグド語であると明らかにした文書の写真は、1933年春にレニングラードのすぐれたイラン学者アレクサンドル・アルノルドヴィチ・フレイマン *Aleksandr Arnol'dvich Freiman* (1879-1968年)のもとへ送られ、彼は、同年ムグ山周辺の考古学調査団を率いたのであった。結果として、8世紀末に滅んだペンジケントの最後の君主、ソグドのデーワシュティーチュ *Devashlich* 公の文書が発見され、これらはレニングラードの東洋学研究所に移された。このコレクションは、ソグド語による文書を71件、漢語3件、アラビア語1件を有している。

最後に東洋学研究所への大規模な将来があったのは、1935年のことであり、このとき、ソ連科学アカデミー極東支部から、明らかに20世紀初頭に中国からロシアに運ばれた中国語写本が移されたのである。当初、これらの写本は国立極東大学の書庫に入り、そこから、1932年にソ連科学アカデミー極東支部に移され、その後、レニングラードにもたらされた。特別の価値を持っているのは、中国の多巻本の美術画集であり、これらはフォンド NOVA に入っている。この中には18世紀の多色刷り5巻本画集 (N51) があり、仏典を主題とする物語と絵を含んでいる^(xxxviii)。

きわめて興味深い戦闘場面の画集⁽³⁶⁾ (N54) があり、我々の書庫には6点が存在する：1) 御筆平定西域戦圖十六詠并圖、2) 御筆平定臺灣戦圖十二詠、3) 御筆平定安南戦圖六詠、4) 御筆平定兩金川得勝圖十六詠并圖、5) 御筆平定独苗戦圖四詠、6) 御筆平定苗疆戦圖十六詠 ((1)西域(2)台湾(3)ヴェトナム(4)東西四川(5)独苗(6)苗疆の平定にかかわるもの) である。画集は、18世紀フランスで印刷された版画が様々な葉数で両面刷となっており、そこには乾隆帝 (1736-1795年) に

よる中国辺疆の征服にかかわるエピソードが描かれている。当初、画集は10点あり、そのことは西域平定にかかわる画集の後書きが言及している。乾隆帝が辺疆平定のための10度にわたる勝ち戦⁽³⁷⁾を経験し、自らを「十を統一する老人」(十全老人)と呼んでいたことは、よく知られている。

さらにフォンド NOVA (N 56) の劉向(紀元前77-6年)撰『道教の仙人の伝記』(列仙傳)という14冊の画集が芸術的に高い水準にある。画集は、2冊を除いて、18枚の両面刷葉を持ち、青い絹で縁取りされている。それぞれの葉には、仙人を描写した絵と、伝記を記した紙片がある。

写本フォンドの中国部門に最後に将来された大きな「コレクション」の一つは、ポート・アーサー「旅順」のアーカイヴであり、ロシア政府が1898年に中国から25年期限で遼東半島の土地を租借した後、旅順口市からまずヴラディヴォストークに運ばれたものであった。ポート・アーサーのアーカイヴは、基本的に、中国語の軍事関連文書から成るものだが、1947年にソ連科学アカデミーの指令により、ラザル・イサエヴィチ・ドゥマン *Lazar' Isaevich Duman* (1907-1979年) がレニングラードに移したのであった。

ペテルブルク東洋学研究所のフォンドのための小規模の買い付けは、現在でも行われている。2003年には個人から19世紀の日本の木版画『ちよだの おおく』⁽³⁸⁾を、2006年には、古書肆を通じて、19世紀の庶民文化の例となる日本の巻き物を入手した。

ペテルブルク東洋学研究所のコレクションは、あらゆる世代の東洋学者の努力によって形成されてきた。これらが総合的な東洋研究にとり、科学研究の長期的基盤となることを信じたい。

(翻訳：野田 仁、日本学術振興会特別研究員)

〔註〕

- (1) 以下、「ペテルブルク東洋学研究所」と読み換える。また [] は訳者による説明を示す。原註は (I)、(II)、(III)...、訳註は(1)、(2)、(3)...で示される。
- (2) 植物学者。
- (3) アンドレイ・イヴァノヴィチ。ドイツ出身の外交官。
- (4) 現在のロシア科学アカデミー・ピョートル大帝名称人類学民族学博物館。
- (5) 澁谷浩一「露清関係とローレンツ・ランゲーキャプタ条約締結に向けて一」(『東洋学報』第72巻 3・4号、1991)を参照。スウェーデン出身のランゲは、1720-22年にロシア領事として北京に滞在していた。
- (6) 元アレppoの領事であった。
- (7) al-Hariri、マカーマートを大成。
- (8) *Kitāb al-Fihār*。著者は北シリア生まれ。
- (9) 11世紀前半にギリシャ語から翻訳。アンティオキアの輔祭であった。
- (10) シリアのアレppoで書き写された。
- (11) ヤコヴ・イヴァノヴィチ (1779-1847年)。ロシアにおけるチベット文献研究の創始者。
- (12) ニキタ・ヤコヴレヴィチ (1777-1853年)。1807年から21年まで第9回宣教師団団長として掌院に昇り、北京に滞在していた。
- (13) 独語 Münzkabinett に由来する。
- (14) セフニア *Sekhnia*・チヘイゼは18世紀の歴史家で、カルトリの宮廷の主計長官であった。その作品『王の人生』の中で1653-1739年のグルジア史を描いた。その続きを記したのがパプナ *Papuna*・オルベリアニで、『カルトリの出来事』と題し、1739-1758年の事柄を記している。
- (15) ペテルブルクに居たグルジア皇子で学者。1837年よりペテルブルク科学アカデミーの名誉会員と

なる。プロッセとの間に往復書簡がある。

- (16) アナトリア半島東南部を指す。
 - (17) ゴンボジャブ・ツェベコヴィチ (1873-1930年)、ブリヤートのチベット・モンゴル学者で1899-1901年にチベットを訪れ、ラサに滞在した経験を持つ。
 - (18) ギャンツェ (江孜) にある寺院。
 - (19) ラサにある。
 - (20) ラサ郊外のゲルク派寺院。
 - (21) バザル・バラディエヴィチ (1878-1937年)、ブリヤート出身のモンゴル・チベット・仏教学者。1906-07年にかけてラブラン寺を旅行した。荒井幸康「1930年代のブリヤートの言語政策—文字改革、新文章語をめぐる議論を中心に—」『スラヴ研究』52号、145-176頁、2005年も参照。
 - (22) 甘肅省夏河にある寺院。
 - (23) 1814-1875年。中国語通訳として来日。初代の駐日ロシア領事。このコレクションは彼の息子が売却話を持ちかけたものである。
 - (24) プルジュヴァルスキーの指導を受け、ロシア地理学協会の探検活動に参画した。
 - (25) インド学者。1900年より科学アカデミー会員で、アジア博物館第7代館長でもある。
 - (26) モンゴル語文献については、以下の文献を参照：中見立夫「サンクト・ペテルブルグのモンゴル語典籍・史料—その収集の歴史と現状—」『東方学』(第99輯)、144-156頁、2000年。
 - (27) テュルク語学者。1910年に『金光明王最勝王経』をマローフと共編し出版した。当館第5代館長
 - (28) トゥルファンとクチャの間に位置する。
 - (29) 「東洋文庫所蔵」図像史料マルチメディアデータベース (<http://dsr.nii.ac.jp/toyobunko/La-56/V-1/>) を参照のこと。
 - (30) 護国三部経の1つ金光明最勝王経のことである。
 - (31) マローフが1930年に出版した。
 - (32) 1866年から84年まで北京に滞在した。
 - (33) 駐コンスタンチノーブルのロシア公使であった。
 - (34) 『環海異聞』は、文化元年 (1804)、レザノフに伴われ、世界一周船ナデージダ号に乗り長崎へ帰還した、仙台藩領石巻の廻船若宮丸漂民からの聞き書き記録である。
 - (35) この文書群の発掘の経緯については次の文献を参照：A.Y.ヤクボーフスキー『西域の秘宝を求めて』(加藤九祚訳)、新時代社、1969年。
 - (36) カスティリオーネらが起稿し、その後フランスにおいて版画を製作した一連の銅版画である。
 - (37) 十全武功 (準噶爾2度、回部、金川2度、台湾、緬甸、安南、廓爾喀 (ネパール) 2度の平定) を指している。
 - (38) 橋本周延画『千代田の大奥』明治28年 (1895)。
- (i) [Бакмейстер И.Г.]. Опыт о библиотеке и кабинете редкостей и истории натуральной Санкт-Петербургской Императорской Академии наук [サンクト・ペテルブルク帝国科学アカデミーの骨董および自然史関連の図書室および所蔵庫にかんする試論], изданный на Французском языке Иоганом Бакмейстером, подбиблиотекарем Академии наук, на российский язык переведенный Васильем Костыговым. [СПб]. Напечатан в типографии Морского шляхетского кадетского корпуса. 1779. С. 87.
 - (ii) Материалы для истории Императорской Академии наук [帝国科学アカデミー史のための資料集], Т. V (1742-1743). СПб, 1889. С. 324.
 - (iii) Азиатский музей. Статья академика Дорна [アジア博物館：アカデミー会員ドルンの論文] // Музеи Императорской Академии наук [帝室科学アカデミー博物館]. (Отдельный оттиск [抜き刷り]). С. 25.
 - (iv) Интимная переписка Феофана Прокоповича с Яковом Марковичем [フェオファン・プロコ

- ポヴィチとヤコヴ・マルコヴィチの親密な往復書簡] // Киевская старина [キエフの往時]. Т. II. 1882. С. 508; Станюкович Т.В. Кунсткамера Петербургской Академии наук [ペテルブルク科学アカデミーのクンсткаメラ]. М.-Л., 1953. С. 36.
- (v) [Бакмейстер И.Г.]. Опыт о библиотеке [図書室および所蔵庫にかんする試論]. С. 93.
- (vi) [Бакмейстер И.Г.]. Опыт о библиотеке [図書室および所蔵庫にかんする試論]. С. 86-87.
- (vii) Dorn B. *Das Asiatische Museum der Kaiserlichen Akademie der Wissenschaften zu St. Petersburg* [Санクト・ペテルブルクにおける帝国科学アカデミーアジア博物館]. St Petersburg, 1846. S. 10.
- (viii) Азиатский музей Российской Академии наук. 1818-1918. Краткая памятка [ロシア科学アカデミーアジア博物館, 1818-1918年: 簡潔な覚え書き]. Пг, 1920. С. 69.
- (ix) Goreglyad V.N. The Oldest Russian Collection of Japanese Manuscripts and Wood-block Prints // *Manuscripta Orientalia*. Vol. 2, no 1, March 1996. P. 31.
- (x) Архив востоковедов СПбФ ИВ РАН [Санクト・ペテルブルク東洋学研究所、東洋学者アーカイヴス]. ф. 152, оп. 2, ед. хр. 9. Л. 1-146.
- (xi) Акимускин О.Ф. К истории Формирования Фонда рукописей арабской графики СПбФ ИВ РАН. (Рукопись) [Санкто・ペテルブルク東洋学研究所アラビア文字写本フォンドの形成史について (未公刊の手稿)]. С. 1.
- (xii) Goreglyad V.N. The Oldest Russian Collection of Japanese Manuscripts. P. 31.
- (xiii) Материалы для истории Императорской Академии наук [帝国科学アカデミー史のための資料集]. Т. IV (1739-1741). СПб, 1887. С. 750.
- (xiv) Копанева Н.П. Рукописные каталоги Кунсткамеры о китайских коллекциях второй половины XVIII в. [18世紀後半の中国語コレクションについてのクンсткаメラの写本カタログ] // Санкт-Петербург - Китай. Три века контактов [Санкто・ペテルブルク = 中国: 3世紀にわたる交流]. СПб, 2006. С. 27-28.
- (xv) 以下の文献を参照: Musei Imperialis Petropolitani [ペテルブルク帝室博物館]. 1741; Bibliothecae Imperialis Petropolitanae [ペテルブルク帝室図書館] pars I-[4]. СПб, 1774.
- (xvi) Арабская Псалтырь [アラビア語聖詠経]. Приложение к факсимильному изданию Рукописи А 187 «Арабская петербургская лицевая Псалтырь» из собрания Института востоковедения (Санкт-Петербургский Филиал). Подготовили Вал. В. Полосин, Н.И. Сериков, С.А. Французов. Под общ. ред. Н.И. Серикова. Санкт-Петербург - Воронеж, 2005. С. 11-12, 92.
- (xvii) Catalogue des Livres Chinois, Japonais, Mantchous, Mongols, Tibetains, Tonquinois, Samscrits etc. de la Collection du Conseiller d'Etat actuel Baron Schilling de Canstadt [国会議員であるカンシュタットの男爵シリグ所蔵品の中の中国語、日本語、満洲語、モンゴル語、チベット語、トンキン語、サンスクリット語等書籍のカタログ] // Архив востоковедов СПбФ ИВ РАН [Санкто・ペテルブルク東洋学研究所、東洋学者アーカイヴス]. ф. 152, оп. 2, ед. хр. 30
- (xviii) Чугуевский Л.И. Шиллинг Павел Львович [パヴエル・リヴォヴィチ・シリグ]. [Обозрение фонда № 152 Архива востоковедов СПбФ ИВ РАН]. Вступление и публикация И.Ф. Поповой // Письменные памятники Востока [東洋の文献遺産]. № 1 (4). 2006. С. 259.
- (xix) АВ [東洋学者アーカイヴス]. ф. 56, оп. 1, ед. хр. 112; ф. 56, оп. 1, ед. хр. 115. Л. 1-18, 57-58.; ф. 56, оп. 1, ед. хр. 131.
- (xx) Чугуевский Л.И. Шиллинг Павел Львович [パヴエル・リヴォヴィチ・シリグ]. С. 261.
- (xxi) Уставы Академии наук СССР [ソ連科学アカデミー規約]. М., 1974. С. 112, 117-118, 190.
- (xxii) Бертельс Д.Е. Введение [序論] // Азиатский музей - Ленинградское отделение Института востоковедения АН СССР [アジア博物館、ソ連科学アカデミー東洋学研究所レニングラード支部]. М., 1972. С. 19.
- (xxiii) Бертельс Д.Е. Введение [序論]. С. 21.

- (xxiv) Воробьев-Десятовский В.С. Собрание индийских рукописей Института востоковедения Академии наук СССР [ソ連科学アカデミー東洋学研究所のインド写本コレクション] // Посова Т.К., Чижикова К.Л. Краткий каталог индийских рукописей Института востоковедения РАН [ロシア科学アカデミー東洋学研究所インド写本の小カタログ]. М., 1999. С. 9.
- (xxv) Орбели Р.Р. Кавказоведение [コーカサス学] // Азиатский музей - Ленинградское отделение Института востоковедения [アジア博物館、ソ連科学アカデミー東洋学研究所レニングラード支部]. М., 1972. С. 474.
- (xxvi) Орбели Р.Р. Кавказоведение [コーカサス学]. С. 475.
- (xxvii) Меньшиков Л.Н., Чугуевский Л.И. Китаеведение [中国学] // Азиатский музей - Ленинградское отделение Института востоковедения [アジア博物館、ソ連科学アカデミー東洋学研究所レニングラード支部]. М., 1972. С. 83.
- (xxviii) Пучковский Л.С. Предисловие [はじめに] // Монгольские рукописи и ксилографы Института востоковедения [東洋学研究所のモンゴル語写本および木版印刷物]. Т.1. М.-Л., 1957. С.1.
- (xxix) Воробьева-Десятовская М.И. Собрание восточных рукописей Санкт-Петербургского Филиала Института востоковедения Российской Академии наук [ロシア科学アカデミー東洋学研究所サンクト・ペテルブルク支部の東洋諸語写本コレクション] // Письменные памятники Востока [東洋の文献遺産]. № 1. 2004. С. 249.
- (xxx) Богословский В.А. Тибетские рукописи и ксилографы [チベット語写本および木版印刷物] // Востоковедные Фонды крупнейших библиотек Советского Союза [ソ連の大規模図書館の東洋学関連蔵書]. М., 1963. С. 57.
- (xxxi) Петров Н.И. Научные связи между востоковедами и путешественниками-географами в конце XIX - начале XX в. [19世紀末から20世紀初頭における東洋学者・地理学者・探検家間の学術的交流について] // Страны и народы Востока [東洋諸国と諸民族]. Вып. I. М., 1959. С. 260.
- (xxxii) Горбачева З.И. Тангутские рукописи и ксилографы [西夏語写本および木版印刷物] // Востоковедные Фонды крупнейших библиотек Советского Союза [ソ連の大規模図書館の東洋学関連蔵書]. М., 1963. С. 51-52.
- (xxxiii) Меньшиков Л.Н. Описание китайской части коллекции из Хара-Хото (Фонд П.К. Козлова) [カラホト・コレクションの中国語部分についての記録 (P.К.コズロフのフォンド)]. М, 1984. С. 9.
- (xxxiv) Меньшиков Л.Н. Описание китайской части коллекции из Хара-Хото [カラホト・コレクションの中国語部分についての記録]. С. 17.
- (xxxv) 俄藏敦煌文献. Шанхай [上海]. Тт. 1-17, 1994-2000.
- (xxxvi) Ольденбург С.Ф. Записка о трудах Василия Михайловича Алексева, младшего ученого хранителя Азиатского музея [アジア博物館の保護者にして若き研究者ヴァシーリー・ミハイロヴィチ・アレクセーエフの業績にかんする覚え書き]. 1913-1918. (Приложение к протоколу X заседания Отделения исторических наук и Филологии Российской Академии Наук 18 (5) сентября 1918 года). // Известия Российской Академии Наук [ロシア科学アカデミー紀要]. VI серия. Петроград, 1918. С. 1747.
- (xxxvii) Akimushkin O.F. Muraqqa'. Album of the Indian and Persian Miniatures of the 16-18 Centuries and the Models of the Persian Calligraphy of the Same Period // *Manuscripta Orientalia*. Vol. 1, No 3. December 1995. P. 67.
- (xxxviii) Маракуев А.В. Каталог китайских рукописей в Библиотеке Дальневосточного отделения АН СССР [ソ連科学アカデミー極東支部図書館の中国語写本カタログ]. Владивосток, 1932. С.1-3.

本研究集会は、科学研究費補助金基盤研究A「東アジア所在の前近代日本関係史料の研究」(課題番号15202017、研究代表者:保谷 徹)の一環として、その経費の一部も使用して行なった。